

河上肇記念会報

No 10
1981. 10. 1

〒542

大阪市南区長堀橋筋一―三（丸善石油ビル）
千代田商事内 河上肇記念会
電話 （〇六）二五二―三六九六
振替口座 大阪 三一三一―九五

八一年度 総会御案内

行楽の秋 いかがお過ごしですか。今年もいよいよ総会の季節になりました。

本年は藤田敬三先生（大阪経済大学学長）をお招きして河上肇先生の思い出を語っていただきます。総会の日程は左記の通りです。多数御参会の程、お願い申し上げます。

記

一、日時 一九八一年一〇月二五日（日）

午前十一時～午後三時

二、場所 京都 法然院（下図参照）

三、臨時会費 三、〇〇〇円（会場費、昼食費含む）

同封のハガキで一〇月一七日までに出欠の御返事を願います。
（お手数ですが四〇円切手を貼って下さい。）



1. 乗り物（京都市営バス）

- ◆ 国鉄・近鉄京都駅→5番岩倉行（浄土寺下車）
→地下鉄四條烏丸乗換え
32番銀閣寺行（法然院町下車）
- ◆ 阪急四條河原町駅→32番銀閣寺行（法然院町下車）
- ◆ 京阪三条駅→5番岩倉行（浄土寺下車）

ごあいさつ

杉原 四郎

世話人代表になるように大門先輩や大橋先輩にすめられながら、これまでおことわりして参りました。しかし、とうとうお引き受けする気持ちになりましたのは、御高齢の住谷先生をこれ以上会のこと御わずらわせするべきではないし、また会の運営はすでに岡村大久保、細川の三氏を中心としてきちんとなされてゆく体制がととのっているので、御引きうけても皆さんに御迷惑をかけずにすむのではないか、と考えたからです。

住谷先生はじめ諸先輩や皆さんの御支援をえて、会の活動が、会員各自と河上肇との心のつながりを保持し、さらに一そうふかめてゆくうえに役立つよう、つとめたいと思っております。

どうかよろしくお願い申し上げます。

住谷先生に謹んで

御礼申し上げます

創立以来の会の代表、末川先生がお亡くなりになって、そのあとを住谷先生に是非ついで頂き度いものと安井世話人と一緒にお願い参上したときの事を覚えてゐる。先生は河上先生とは直接関係はなくお弟子さんもおられるであろうし、第一老齢でもあると申されて固辞されたのであるが、安井さんの口説き上手もあって、にわかにも末川先生を失って途方にくれている私共のたつての願を容れて、出来る丈早く後を見付けよとの条件でお引受けを願ったのであった。其後、河上肇生誕百年記念事業があつて御心労をかけたり、又御令聞を失われる御不幸があつたり、時にふれ先生の御口から、又御手紙を頂戴したりして早く解放せよとの要請をうけながら往再日を送つて今日に至つたのは、申し訳のない私共の怠慢と申さねばならぬ。ようやく私共の一致した要請を容れて杉原四郎先生に就任を承諾して頂き、住谷先生との御約束を果す事が出来、私共肩の荷を下ろした思いである。

杉原先生は往年、会の創立の時の記念講演をお願いして以来、会の世話人の一人であるが今春から甲南大学の学長に就任され、且つ河上肇全集の編集者としてその発刊を間近に控え御多忙を極めておられるが、会に最もふさわしい方を得て嬉しい限りである。

住谷先生は御高齢であるが、引きつづき私共の顧問として御力をお借し下さるのは勿論である。会員一同、益々御加餐を祈るや切である。

(大門生)

一冊の河上肇旧蔵書

ボルヒアルト『通俗資本論』を

めぐって

細川 元雄

今年の春、河上肇の旧蔵書一冊が京都大学経済学部河上文庫に贈られた。それは、ドイツ語原本のボルヒアルト『通俗資本論』(Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie. Von Karl Marx. Gemeinverständliche Ausgabe, besorgt von Julian Borchardt. 2 unveränderte Auflage, Berlin: Lichtstrahlen, 1920. 324 S.)である。

寄贈者は杉本俊朗先生(現在、横浜商科大学教授)である。先生はわが



国マルクス学の権威であり、社会科学書誌にも造詣の深い方である。先生が本書をどうして入手されたかはお尋ねしていないが、戦後古本市場で求められたものと私は推定している。

本書の扉には、「一九二二年五月伯林ヨリ取寄ス」と左側にペン書きされ、中央に「河上肇」

印が押されている。さらに扉の右側に「呈上 山本勝市君 河上肇」とインクの色が違ふ書き入れがあり、さらに本書が山本蔵書となったことを示す「山本文庫254」と「山本」の丸印とが捺印されている。入手年月の記入と「河上肇」の捺印は、河上の旧蔵書の多くがもっている特徴である。序文一〇ページ、本文三二四ページの本書には、河上使用の特有の色鉛筆によってところどころに線引きがあり、本書補論の「マルクス恐慌論の本質」の章には赤ペンによる線引きとともに、三二一ページ欄外には次のような識語がなされている。「茲に説明してあるボルハルトの見解は、Tugan-Baranovsky の Disproportionalitätstheorie (不比例説)と同じ見解で、それは不完全な説明である」と。

さらに、山本勝市氏(後述)が読まれた痕跡が黒鉛筆、黒ペンの線引きと書き込みとして残っており、裏扉に「『自分に明瞭しない事を訊出す事は断じてよくない』とは河上博士が本書を贈らるゝに當つて改めて注意された処である 六月廿九日 山本生」と揮毫されている。本書をめぐって、ここで若干の詮索を試みてみよう。

二

まず本書の著者ボルヒアルトを簡単に紹介しておこう。ユリアン・ボルヒアルトは、一八六八年二月一三日、ポーランドのブイドゴシュチエ市のプロムバークで生れ、一九三二年二月一六日に死亡した(『マイヤー新百科』、ライプツヒ、一九七二年刊)。彼は社会民主主義の政治家であり、『レーニン全集』(第二巻)の「人名訳注」によれば、「ドイツ社会民主党左派、マルクス主義の普及家、経済学者」である。

一八九〇年代から、ジャーナリストとして社会民主主義の諸新聞で活躍し、一九一一年、彼は日和見主義反対の立場から、プロイセン邦

議会の議員となった。一九一三年から彼は左翼雑誌『リヒトシュトラールン(Lichtstrahlen「光線」)』を編集、発行した。この雑誌のもとに「国際主義的ドイツ社会主義団(Internationale Sozialisten Deutschlands)」を結成し、かれらが「ツィンメルワルト左派」(Zimmerwald der Linken)に仲間入りした。ツィンメルワルト左派とは、「戦争(第一次大戦)と資本主義に終止符を打つ」立場から、第二インターナショナルの崩壊後、新しいインター設立を目指して、レーニン、ラディックなどと同調した少数派であり、一九一五年秋にスイスの小さな村ツィンメルワルトで国際会議が開かれたことからその名称がつけられたものである。一九一七年以降、ボルヒアルトは小ブルジョア・アナキスト的立場に墮落し、革命運動から遠ざかった。と前掲の『マイヤー新百科』は一口にかならずけている。私の調査不足のため、大戦以前と以後の彼の足跡をあきらかにしえない。そこで、次に彼の著作の概略をたどってみよう。

(1) 一八九七年、ジョン・レー(アメリカの経済学者)の『八時間労働』のドイツ語訳。レーは一八二〇年代以後、アメリカの経済的後進性を反映して保護貿易論を基調としたD・レイモンド、F・リスト、M・ケアリなどの「アメリカ体制派」の人物である。この書には訳者の注記もない。

(2) 一九〇〇—〇二年、マルクス『資本論』全三巻 フランス語訳。この翻訳について、彼目からのちに「資本論」解説を書いた『通俗資本論』の序文(一九一九年八月付)で次のように述べている。「……私が職業的にマルクスの『資本論』を極めて熱心に研究せねばならなくなつてから今で凡そ三十年を経、又既に凡そ二十年の昔に於て、私はブリュッセルの社会科学研究所の依頼を受けて、(ベルギーの同志ファンデリーと協力して)、『資本論』の第二巻及び第三巻を仏訳したことがある

」(後出、水谷訳による)と。

(3) 一九〇九年、『経済学の基礎概念』。マルクスの価値論、剰余価値論を解説した小冊子で、一九二〇年改訂、増補し、『マルクス理論における国民経済学の基礎概念』として出版された。

(4) 一九一〇年代に入ると数種の小冊子が刊行されている。

(4) 1 a、『一九一四年八月四日前後ドイツ社会民主党は自己否定したか』(現物未見)。(4) 1 b、『戦争でどうして金持ちになったか』。

(4) 1 c、『プロレタリアートの独裁』。(4) 1 d、『共産主義の未来』。

(4) 1 e、『史的唯物論—一般人のための唯物史観入門』。(4) 1 f、『科学的社会主义入門』。そして一九一九年に(4) 1 g、『通俗資本論』が出された。これらはいずれも『リヒトシュトラールン』誌の出版社(発行人はボルヒアルト)からである。(4) 1 gは、『The People's Matrix』というタイトルで一九二一年に英訳され、(4) 1 eは一九三一年に仏訳されている。日本語訳は後述するが、(3)の改訂・増補版が『マルクス経済学大綱』、(4) 1 eが『史的唯物論略解』、(4) 1 fが『科学的社会主义序論』、(4) 1 gが『通俗資本論』のタイトルで一九二三—二四年に出版された。こうしてみると彼が「マルクス普及家」としての役割をはたしていることが理解できる。

(5) 一九二〇年代に入ると、(4)のe、fの改版、gの増版が出るほか、

(5) 1 a、『一七九七—一九二〇年革命期の紙幣』(一九二二)、(5) 1 b、『ドイツ経済史第一巻—ホーエンシュタウエン家の最期まで』(一九二三)、(5) 1 c、『同 第二巻—ホーエンシュタウエン家の最期から農民戦争まで』(一九二四)、(5) 1 d、『世界資本と世界政策』(一九二七)などがある。先きの『レーニン全集』「人名訳注」で、ボルヒアルトは「著積論、帝国主義論でローザ・ルクセンブルグと意見を同じくした」と記されているが、同じく先きの『マイヤー新百科』の評価とともに彼の人物

と思いがあきらかになるよう専門家の研究をまつ。

三

ボルヒアルトがわが国に導入されるのは、大正一〇（一九二一）と二五）年である。この導入史の最初は河上肇である。河上は大正一〇（一九二一）年二月（八月）に④―eを『史的唯物論略解』として『経済論叢』に連載した（のち『唯物史観研究』に収録）。河上は、本書が「……通俗易解を旨としたもので……学問上重きをなす者では無いが、しかし史的唯物論（又は唯物史観）の要領を簡単に書き上げたものとしては、類書中最も善く出来ているものである」と紹介の意義を述べている。また同年三（四月）に、河上の個人雑誌『社会問題研究』に「社会主義の未来図」として④―fの最後の二章を翻訳紹介した（のち『社会主義制の下における個人の生活』と改題して『社会組織と社会革命に関する若干の考察』に収録）。次に前節でふれたように、ボルヒアルトの『マルクス普及家』としての四つの著作が大正一二（一四年）に翻訳刊行された。ここではその訳者と河上との関係を中心に追ってみよう。

(1) 大正一二年九月、水谷長三郎訳『科学的社会主义序論』、同人社二四五ページ。

訳者水谷長三郎（一八九七―一九六〇）は三高、京大（法）卒業で、大学在学中「労学会」（社会科学研究グループ）を組織した中心人物で、労働者教育や新人会（東大）との交流に活躍した。労学会などで河上の指導を受けた人である。本書の「訳者序」を少し長いが引いてみると。

「私が本書を訳したるは、大正十年の七月頃である。当時私は、京都帝国大学を卒業して直ちに大学院に入り、大原社会問題研究所の嘱託となり、先きに上梓されたるツガン・パラノウスキーの『唯物史観批判』の翻訳に従事する傍ら、私一個人の仕事として本書を訳したのである。

そうして恩師河上先生の御一読の後直ちに上梓する筈であったが、先生は該翻訳に幾多の誤解や誤訳のあることを指摘され、今一度綿密に訳し直すよう懇々と云って寄せられた。当時私は比叡山上にあり、直ちに改訳に従事した。と、河上の『社会問題研究』の抄訳（前掲）にふれ、「……さうして全般を通じ、河上先生の御助言に負ふは勿論であるが、殊に第三章、第四章、及び第八章は先生自ら加筆せられ、また第九章及び第十章は、先生の抄訳を大体に於て借用することにした」と。本訳書は今で言えば河上・水谷の共訳と言えるものである（なお『自叙伝』の「教師としての自画像」参照）。

(2) 大正一三年六月、水谷長三郎訳『史的唯物論略解』、同人社、一二四ページ。

「訳者序」には、「本書が我国に於て初めて紹介されしは」と前述の河上の『経済論叢』にふれ、「（河上）博士の底本は一九一九年版であり、余の底本は一九二二年版の第二版である」と、改訂増補版を用いたことを指摘し、とは言え「博士の抄訳に負ふところ多く、時にはその借用したる箇所もある」と述べている。

(3) 大正一三年一二月、水谷長三郎訳『通俗資本論』、同人社、五六二、三九ページ。

本書の「訳者序」には、河上に対しては謝辞のみとなり、本訳書が「贈呈 河上先生侍史 一四、一、五 訳者」と河上に贈られ、現在旧蔵書として河上文庫に残っている。

(4) 大正一四年四月、田中九一訳『マルクス経済学大綱』（社会思想叢書第一編）、弘文堂、三二三ページ。

訳者田中九一（一八九六―）は、三高、京大（法）卒業、新人会のメンバーで、卒業後東亜経済調査局に入り、新人会の指導に活躍した。H・スミスの『新人会の研究』によると、大正一三年には田中がチュート

―としてボルヒアルト『人民のマルクス』（前掲(4)―gの英訳）をテキストに研究会がおこなわれた。田中は『社会思想』の同人でもあった。本訳書の「訳者序」には、本書が弘文堂の「社会思想叢書」の一冊として刊行されるに際して、河上の労がとられたことに謝辞が述べられている。本訳書も田中より河上に贈られ、現在文庫に残っている。

この頃の雑誌上でのボルヒアルトの翻訳・紹介は、すでに述べた河上のもののほか数点あるが、とくに注目すべきものは、ボルヒアルトが大正一二年七月の『解放』誌に「精神生活と経済状態との関係」という論文を寄稿していることである。訳者黒田礼二（本名岡上守道）は末尾の解説で、ボルヒアルトが現代（その当時）ドイツの碩学、唯物史観の学殖において世界的な地位を占める人であり、わが国へは河上肇博士によって彼の学説が紹介されていること、さらにこの論文が「我誌の為に寄せられたもの」であることを述べている。

ボルヒアルト導入史の最後に、河上とボルヒアルトとの交流にふれておこう。京都大学の河上肇文庫には、ボルヒアルトの著書が二冊あり、今回の寄贈によって三冊となった。すでにあったものは、(3)の一九二〇年改訂・増補版であり、扉には一九二二年九月と入手の年月が毛筆で書かれ、「千山万水樓主人」の捺印ある。最終ページの空白上段に「Bian Borchart Gr.-Lichtenfeld-W. Hedwigsstr. Berlin」とボルヒアルトの住所が書き入れてある。もう一冊は、(5)―cで、タイトル・ページ右中段に「Überlebt vom Verfasser 7. 1. 1924」一九二四年一月七日著者贈呈（筆跡が河上でないことと一九二四年刊行のものからして、一月七日が受取った日付でないことから、著者ボルヒアルトの書き入れたものであろう）と河上に直接贈られたものである。ボルヒアルトの手紙類が残っていないので、推定にすぎないが、この書き入れによって二人の交信があったと思われる。特定の雑誌の主宰者で

あったこと、マルクス普及家であったことなどに二人の共通性を感じるのは余りにも非科学的であろうか。

四

最初にもどって、この一冊の旧蔵書、ボルヒアルト『通俗資本論』が河上からいつ頃、どうして山本勝市氏に贈られたのかを解明しなければならぬが、今日このことをあきらかにする資料はなにもない。山本勝市氏は、明治二九（一八九六）年和歌山で生れ、大正一二年三月京都大学経済学部を卒業し、和歌山高等商業学校の講師、やがて教授となる。

そのうち国民精神文化研究所（文部省の「思想善導」を目的とした）の所員となった人である。戦後は、最新の『人事興信録』によると衆議院議員に五回当選、通産政務次官、自民党総務、衆議院大蔵委員長などを歴任し、現在中央学院大学教授である。

河上と山本とは師弟関係であった。山本が昭和一四年に出版した『計画経済の根本問題』の「自序」で山本自らが語っているので、少し長いが引用してみると、

「想へば私が社会主義を問題とするに至ってから廿数年の歳月が流れて居る。明治四十三年、幸徳秋水を首魁とする大逆事件が発覚したとき、私は隣村の小学校につとめて居たが、たまたま其の居村から二名の被告を出したといふこと、殊に其のうちの一人は村でもかなりの人望を集めて居たといふ事實は、私に一種の複雑な印象を残した。私がクロポキンとマルクスの名を聞き、社会革命の輪廓を耳にしたのは其の時がはじめてである。大正五年大阪朝日新聞に連載された河上博士の『貧乏物語』を、私は非常な感激を以て読みつづけた。そうして貧富の問題の解決が、強く念頭を支配して離れぬ様になった。当時大阪に於ける私の生活があまりにも激しい貧者と富者との対比の中に置かれて居たからであ



京大河上文庫

ろう。其の後京都に於ける高等学校から大学にかけての六年間、時は恰もデモクラシー、無政府主義、社会主義、共産主義等の思想が次々に燎原の火の如く焰上した時代であるが、私も亦この時代の

激しい思潮の影響を受けて次第に左に傾いて行った。(中略)当時私はいはゆる資本主義組織の下に於ける貧富の対立と階級闘争の必然を信じ、

制度の下に於てのみ可能であると信ぜざるを得なかった。自らの忠君愛国の精神を信頼し、また労働者を煽動することのよくないことを痛感して居ながら、資本主義の矛盾と社会主義の理想とを大衆の前に幾度叫んだことであらう。舞鶴の海軍工廠の職工の集まりに招かれて駆付けた時など、たしか高等学校の卒業試験の始まる前日であったと記憶する。思想的には河上博士に傾倒し、そのために大学も京都の経済学部を選んだのである。博士からは学問研究の上のみならず、色々とつくせぬお世話になつて居る。和歌山高商への就職も博士の推薦によつたのである。しかも私は大学在留中から、田島錦治、山本美越乃両博士の国家観念と其の人格とは強くひかれて居た。さうした矛盾が私の大学時代を貫いて居るのである。(中略)私の思想に重大な転機を与へたものは二年半の外国留

学であった。(中略)昭和二年の秋に帰朝して見ると、日本の共産運動は恐ろしいまでに普及して居た。私は微力ながらも、かたくマルクシズムの理論的克服を決意して正面から批判して行つた。生徒は授業中に立上つて反抗して来た。講演会場には労働党派からの脅迫状が届いて居た。曾つての恩師からは堪へ難い言葉を以て罵られもした。『マルクシズムを中心として其の説明と批判』は私の処女出版であるが、当時の忘れ難い記念物でもある(以下略)。この「自序」は山本の「転向」声明でもある。

本題にもどつて、本稿最初にあつたようにボルヒアルトの『通俗資本論』は河上が大正一〇年の五月に入手し、精読している。そして山本が本書の裏扉に河上の教示を書き入れたのが年号なしの「六月二十九日」であった。何年の六月二十九日か、推定できることは山本が卒業した大正一二年前後だろうとしか言えない。その理由は大正一三年の一月には水谷沢が出版されていることと蔵書家であつた山本の文庫番号が二五四と非常に小さいことからである。では、本書がいつ頃山本の手から離れた(処分された)のであろうか、すでに引用したように恩師河上との訣別の時期であつたろうと考えるほか推定材料はなにもない。

今回河上の旧蔵書として本書が河上肇文庫に入り、今後の河上研究の一材料になった。ここに記して、寄贈者杉本俊朗先生のご厚志に深謝する次第である。



「貧乏物語」鑑賞

前 川 文 夫

(一)

貧乏物語を一口にして言えば、貧乏を社会の大病と考へ、科学的にその実態を究明して、退治策を述べたものということができると思う。しかし、河上初期の代表作「社会主義評論」でも貧乏は主要テーマの一つであった。

この間十年余り、著者の感覚にあまり変化は見受けられないが、一体、貧乏が切実な社会問題になったのはいつごろからであろう。

この貧乏物語を鑑賞し、著者河上肇を理解しようとするにあたり、私はまず当時の時代背景・社会事情をよくつかむ必要があると思う。その意味で、最近読んだ、住谷一彦編、「求道の入・河上肇」(新評論)の中の「河上肇と現代」(大河内一男)は少し意外であった。その中で大河内は、「大正六年と申せばもちろん第一次大戦中です。戦争は大正三年から大正七年まで続きました。日本は戦争に参加した国の一つでありましたが、たまたま連合軍側に入っており、しかも日本の国土が戦場になる訳でもないし、むしろ日本の産業は軍需産業の膨張ばかりでなく、ヨーロッパの参戦国が戦争に忙殺されておたがい輸出ができないという間に、日本の繊維産業その他の産業が海外のマーケットを根こそぎ手に入れてしまう、悪いことばで言えば、日本は外国の海外市場を戦争のドサクサまぎれに全部抱え込んだとでも申すのでしょうか、ですから日本は戦争中でありますけれども、大正三、四、五、六年、翌年の七年へかけて、大変な戦争景気で産業家は儲かって、儲かって笑いが止らない。

河上肇情報センター

事務局 〇

河上肇に関する単行本、論文がひきも切らずに出て、素人には応接にいとまあらずの盛み深し。それでもなお、新聞、雑誌等で、こんな方がこんな事を河上について言っている……と驚くことも、しばしばです。いかな河上研究家、大学者といえども、そこまでは眼を通すことは……かなうまいとも思うのですが、また浮世のせわしさに紛ざれ、紛ざれて忘却の底なし沼に沈めてしまう。これらのものを収集、整理して、河上研究家や、会員の方々のもとに届けることが出来たら、労多けれど価値ある仕事だと考えられます。

さいわいに、わが河上肇記念会は多士済々、京都大学経済学部にある河上文庫の管理担当の細川元雄氏が、河上肇の研究をしておられるので氏に、この労多き情報センターとしての役割を、お願い致しました。

河上肇の多方面的研究の発展のために、河上肇情報の充実に参加して下さい。

情報集積には次の四原則で……

1. 大小の情報に拘わらない。
2. 他人の情報との重複を恐れない。
3. 掲載雑誌、新聞等の刊行物もしくはその部分のコピー。
4. 当該刊行物名、発行所、筆者名、発行日付をつける。

送り先 606 京都市左京区吉田本町

〒 京都大学経済学部調査資料室 細川元雄

労働者の方も、賃金がどんどん上がり、とくに旋盤工とか、仕上げ工とか、そうしたいわゆる機械工の中の熟練工は四方八方からひっぱりだこ。大変な高賃金で、こちらも笑いが止まらない位でした。それくらい労使双方がうけに入った時代ですから誰もが浪費をやりました。当時の「成金」と呼ばれた連中の浪費ぶりはまことに目にあまるものがあり、またそれを新聞が面白がって報道するものですから、読者の方はおさまりません。こうして浮かれ調子の時代、これが大正五、六年の雰囲気でした。

（中略）そうした状況の中で大正五年、大阪朝日に夏から年末にかけて連載された随想がこの貧乏物語で、当時は戦争景気でうけに入っている日本人ですから、だれも「貧乏」などという問題は考えたこともない。また、そんなことを問題にするのはおかしい、と思っているときに、大新聞の「大阪朝日」に「貧乏物語」という題の随想が連載され……」

これを読むと、当時の事情をよく知らぬものには、貧乏はまだ必ずしも一般民衆の痛切な社会問題とはなっていなかった、たゞ、河上だけが若き日から心にいだいていた特殊な問題であって、切実感のうすい問題であったと解せるようである。

しかし、大内兵衛はこの書の解説（岩波文庫版）で次のように当時の状況を述べている。

「元来資本主義は自らの足で立つようになれば同時に必ず貧乏をもつ。それゆえに資本主義経済学は誕生後間もなく貧乏を問題にしなければならぬのである。日本が資本主義となったのはおそくとも日露戦後であつたろうから、第一次世界大戦の当時ともなれば、もう貧乏を問題とせねばならぬことはその宿命であつた。とくにこの戦争により日本の商品に對して思いがけない好市場が提供されたので、日本にはいわゆる成金が雨後の竹の子のように出現した。一方、インフレによる物価騰貴にもとづいてばう大なる貧民層がはじめて形成せられていた。そこで日本にお

ける社会問題は歴史の上での一大突起として出現したのであるが、それは当然にも、まずもって貧乏の問題として意識せられねばならぬのであつた。しかし、当時この良識を持して天下に呼号するものはだれであるかほもとより未知であつた。（中略）それを社会主義の人々に期するとはできなかった。というのは、幸徳事件以来ひどい弾圧をうけていたため、時流に乗じて直ちに起き上つて、雄叫びをあげる用意は彼らにまだ熟していなかったからである。いわんや、その他の人々においてはたと問題の前に右往左往するだけであつた。このとき、貧乏の経済学は象牙の塔から街頭へ送られねばならなかつた。……」

二人の言われるところをくらべて、私は何となく当時の事情把握に異なる響きを感じる。

もちろん、先の大河内はこの書出版前後数年に限ってその状況を述べており、大内の解説では、大河内のそれを含んでもう一步歴史的に長く解かれているので、表現のちがいはあつてもそのまゝ比べることはできない。しかし、一方は、非常な好景気の世の中にあり、貧乏などだれも夢想だにせぬ状況にあつたと言ひ、一方、貧乏はすでに深刻な社会問題になつており、民衆はどんな方法であれ、その問題解決を待ちこがれる状況にあつたと言ひ、一方には切迫感がないし、一方はそれを感じる。そのためか、二人ともこの書を警告の書と言われているが、その響きが異なつて聞えてくるように私は思う。大河内は「結局、どの国でも国が栄えるとか、あるいは戦争で大いに経済が膨脹するとかいうようなときに限つて、ちょっと裏側をみると下層の庶民は非常に生活に苦しんでいる。物価の上昇とか、物がなくなるとか、あるいは、戦争にひっぱり出されるとか、そういったようなことで普通の庶民は戦争の恩恵を受けないで、むしろその被害を受ける。それはいろいろの格好での貧乏となつて庶民におそひかゝつて来る。それをなぜあなたがたは

理解しないのか」(前掲書)

大内の解説(現代日本思想大系)ではこうだ。「河上が経済学の旅から帰って来た日本は第一次世界大戦であぶくぜみをつかんで好景気になっていた。志士の節慾主義の河上にとってはそのようなぜいたくは許しがたい。これに対して警告するのが自分の義務ではないかと思われた。自分はいって「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」と思い定めたことがあった。また、自分の見て来たイギリスでは、ロイド・ジョージが先頭に立って貧乏征伐をしていた。いまや自分もこの時局に対して、自分の道を言わねばならぬ。」

大河内の表現では、それは「一般民衆への警告」が目的であると言っているように解してよく、一方の大内は、この書の主題でもある「富者への警告」がその目的であると言っているように聞える。単なる表現のちがいで、さういふことと思う一方、一般読者はこの辺り、当時の世相理解に疑義をいだいてもよいところではないだろうか。一方は、一般民衆はまだ感じていない、そんなに切迫感のないことに対して警告しているといっているようであり、他は「富者・成金」の實際行動「奢侈ぜい沢」に対するいましめの書であると言っている。同じ警告でも意味はちがう。

では、河上自身は当時のわが国の社会事情をどう把握していたのである。手もとにある書物を調べてもその辺りよく分らない。この貧乏物語の中でも、河上は当時の状況を直接には述べていない。具体的実例はすべて欧米のものであり、「日本の事情はよるべき正確な調査がないからしばらくおく(貧乏物語二の二)」と断っているし、「もちろん現時のわが国においては貧富の懸隔は決して西洋諸国のごとくはなはだしくなっていない(同書十の三)」とも言っている。これらに関して杉原四郎は「河上肇」(新評論)の中でマルクス資本論の序文を引用しな

がら、次のように説明している。「自分(マルクスの意味)の本書での課題は資本主義経済学の運動法則であるが、その典型的な場所は今日までのところイギリスである。したがって、自分はその理論的展開の主要な例解としてイギリスを選んだのだ。もし、ドイツがイギリスの状態を見て、ドイツではまだまだそんなに悪い状態になっていないというのなら、私は彼らに向けて言いたい。「ひとごとではないぞ」と。「先進国は後進国の未来の姿を示すに過ぎないのだ」と。河上も、貧乏物語でイギリスの例証を主としてあげる場合、マルクスと同じことを考えていたのではないか。」

杉原はこう説明するが、やはり河上が当時の状況を真実どうとらえていたかは明確でない。

しかし、私はいつまでもそれをもやもやのまゝにしておく訳にはいかぬ。貧乏は当時すでに深刻な社会問題になっていたのか否か。河上はどんな社会状況の中でこの書を書いたのか。それらを少しでも明確にさせておくことがこの書を鑑賞するために欠かせぬ仕事である。だが、はじめから、歴史の書物にさえたよっていたら、こんな廻り道をせずとも済んだことかも知れない。例えば、有沢広己他編の「近代日本を考える」(東洋経済)の中の「日本における社会主義の系譜」に次のような記述がある。

「一八九〇年代の日本においては当時の主要な社会問題として貧困がようやくクローズアップされて来ていた。正直と勤勉が成功と富を生み、怠惰は貧乏をもたらすといった考え方はこの時期から転換をみせはじめ、個人の富為よりも、それに敵対的な社会というものの存在を問題にする風潮が台頭して来る。」

さらに、古田光はその著「河上肇」(東大出版)の中で次のように述べている。

「この彼が取り上げた貧乏問題は日本国民にとって当時ようやく切実な問題として意識されはじめていた。……日本資本主義の躍進に伴うその矛盾の激化はもはやだれの目にも蔽い難く露呈されはじめていた。河上が資本主義社会の基本問題としての貧乏問題を取り上げ、熱のこもった文章でその重要性を天下に訴え、その解決策を論じたのはまさにこのような状況においてであつた。」

もちろん、この二書によつてもなお当時の社会問題における貧乏の位置は明らかに不十分で、私は意識的に結論を急ぐ。そんなものは論文でないと云われることを覚悟して。

(1) 大正五、六年ごろ一時表面的に国民全般が戦争景気にうかれるようなことがあつたとしても、貧乏は当時すでに十年來の深刻な社会問題となつてゐた。

(2) 世の学者といわれる人は多くこの貧乏問題に関心を示そうとせず、したがつて、その実態をあばき、原因を究明しようとする空気などほとんどなかつた。

(3) 第二次大戦中ほど極端ではなかつたであろうが、当時すでに言論の自由は極度に制限されてゐた。特に社会主義思想への弾圧は厳しさを増してゐた。

こうした厳しい条件の重なつた中でこの貧乏物語は書かれたのであり、しかも、「貧乏は多くの場合、個人の責任で起るのではなく

国や富者が考えねばならぬことが多いのだ。」と、従来の発想と異なる新しい視点を民衆の前に示した、学者の出版物として最初のものであつた、さういふはあるがそんなことを私は心の中に確認しておきたいと思う。そうでないと、この書がわが国経済学の専門書として、最初の古典であると言われる意味が理解できないし、また一般読者はこの書に対する批評のいくつかをどう考えてよいかわからなくなつてゐるからである。

その方の権威書の一つである『現代日本思想大系』（筑摩書房）の大内兵衛の解説にも貧乏物語に対する意外に厳しい評価がある。「……これはどういふ性質の貧乏物語であるか、それは富者の道徳責任論であり、彼らに対する節儉のお説教である。……結論は案外平凡で別に新しいものではなかつた。それは東洋の儒教が千年來説きふるして來た一片のお説教であつた。……このようにして貧乏物語はそのモラルに於ては日本のブルジョアの儒教的人道主義、即ち、波沢栄一や矢野恒太の論語的説教と大差のないものであつた。……」

こんな評価に接すると、かつての汚職総理がおつていた教育論議を思ひます。時代背景をよく考えず、またこうした解説を皮相的に読むとき、この書の眞の理解からはほど遠くなると思ふのである。一般読者は唯物史観はもちろんのこと、当時の歴史さえよく知らない。しかし、そのために河上を誤解してはならないと思ふ。そんな意味をもこめて、あらためて先に記した(1)(2)(3)を確認してから、私は次の仕事に進もうと思ふ。

(未完)

(滋賀県立高島高校教諭・数学担当)

写真は、河上が愛弟子石川興二に贈つた『貧乏物語』初版の扉裏。ここに書き込まれた河上の献詞は、「僕の全体に対する完全なる理解と同情とを受取りし記念として此のあわれなる著書を重ねて君に呈す 石川 盟兄 大正六年春三月二十九日 僕」である(編集者)。

会 員 通 信

△会報第9号刊行後（五六年二月以降）、会費払込の「通信欄」に書かれた感想・消息などと事務局におよせいただいたお便り（受付順）▽

相澤秀一（池田） 編集その他、事務局各位の御苦労心からお礼申し上げます。

清水靖久（東京） まがりなりにも河上肇のことを研究している私には、杉原氏の全集刊行計画の話や細川氏の資料紹介は、大変参考になりました。

三木 勲（和歌山） 春寒厳しい折毎度ご苦労様です……先日東京で野口務君に偶然お会いしました。本年もご健斗祈ります。先年六月加藤君の遺族を訪ねて参りました、茫々夢の如しです。

吉田千代子（福島） よいお仕事を残して下さる皆様に心から敬意を持っています。……

井上英三（福岡） ……全集刊行の実現を期待いたします。

小島重雄（町田） 今年度から入会させて頂きます。思想家河上肇をいろいろな角度から学びたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

田辺 平（岸和田） 田辺納は昨年五月十九日死去しました。長男の私に変更して下さい。亡父より河上先生と亡父の關係をいつも聞いていました。河上先生の色紙（昭和のはじめ頃、有名な漢詩）、私の自宅にあります。会の発展と各位のご健勝を祈って失礼します。

前川文夫（滋賀） 会報が我々と河上会を結ぶ最も大切なものであり、

その定期的な発行を切望する。さらにその会報に一般人（学者先生ばかりでなく）の論文ものせて欲しいと思うが、そんなことは無理でしょうか。別に寄附を集めてでもそんな企画を立ててほしいものです。

日比憲一（岐阜） 大門英太郎さん、ご苦労さま、虎さんも亡くなった、寂しいかぎり也。

平井重男（長野） 御一同様の御健祥を祈り上げております。

きのこと雲そのいまわしさ早忘れ亦ぞろにおふきなくさき風

雪ふればくらしのてだてすべも無し炬燵に倚りて茶をくむ信濃路

渡辺敬二（盛岡） ……全集発行にご成功なさることを祈っています。

沢村秀夫（宮津） 会報拝受、発展を祈ります。

山下 肇（東京） 私は本年三月東大を定年退官し、四月以降は関西

大学文学部へ移り、東京、大阪半々の生活になります。東京宅はそのままですが、大阪にセカンド・ハウスを設け、貴会ともお近くになりますので、宜しくお願いいたします。

渡辺達也（東京） 会報No.9 充実した内容で全頁通読しました。ありがとうございます。私は先年法然院にはじめてお墓参りをし、その際名刺を入れておきましたところ、思いがけなくごあいさつ状をいただき、それがご縁で入会させて頂いた戦後派でございます。

戦後、世界評論社版の自叙伝を出版とともに一冊一冊よんで、はじめて生きる確信をつかんだあのときの眼からウロコのおちた様な喜びの思いをこのNo.9は新たにしてくれました。感謝！

吉田 忠（滋賀） 私は京大農学部農林経済教室の助教授をしているものです。河上先生にはかねて深い関心と尊敬を抱いておりましたが、河上記念会に入会する機会はありませんでした。今回大橋隆憲先生のおすすりめもあり、入会させていただきたい思います。どう

かよろしくお願いいたします。

田中米一（京都） 大門さんの御努力に感謝いたしております。

飯塚平太郎（今治） 老父も七十三才になりましたので余生の親孝

行をしているところです。仕事は関西で従来通りです。

安藤重次（岡崎） 「大門英太郎宛、ハガキ」

拜啓 河上肇記念会々報を御送付下され有難く拝読、十月十二日の総会の模様もほぼ承知致すことが出来ました。河上肇全集についても成功裡に出版致したいものです。終戦時に河上さんは「あな嬉し嬉しかりけり云々」と歌っていますが、某閣僚のように地理も歴史も修身もなくなって仕舞ったと嘆いた人々も多かったと思います。目下歴史の舞台は革新派から反動派へ移行しつつあります。弁証法だから止むを得ないでしょう。資本主義経済であり、資本家政府の時代だから致し方ないでしょう。暗い谷間がやってくるか、独逸の二の舞いをやるか、平和勢力を結集して反動派の策動をはね返すかという岐路に立っているように思います。まあ精々頑張りましょう。日本国民のため、子や孫のため、人類のためにも。寒さも峠を越したと思いますが、呉々も（御互に）御老体を御大切に祈り上げます。敬白（三月二日消印）

川瀬よ志（大垣）

今日はお葉書（注）ありがとうございました。

法然院は、息子が京大（経）に在学中連れて行ってくれました思い出のお寺でございます。あの激しかった大学紛争の頃、とにもかくにも卒業致しまして銀行に勤め、今はアメリカにおります。私は、子供は学校を出たら社会に適したものと心にきめておりますが、それでも時折息子になつかしくなると法然院へ参って、河上先生のお墓の前に立つのでございます。先日は四回目ですが、ふと思いつい

て記名させて戴きましたところ御丁寧なお便り思いもかけず恐縮致しました。

厚く御礼申し上げます。

（注） 墓前の名刺受けに記名した人に安井さんを通じて御礼のハガキを差出しています。

図書紹介

山田 洸『河上 肇——人と思想』、清水書院 一九八〇年九月刊 四六〇円。

本書は、清水書院「センチュリーブックス」「新書版」の「人と思想」の一冊として刊行された。このシリーズが若い世代の精神の糧を提供するべく意図されたものだけに、本書は格好の河上評伝をなしている。とくに著者山田氏は、すでに「河上肇における科学と宗教」（『現代と思想』誌 第三四号、一九七八年十二月）において、河上晩年の宗教論への傾斜に鋭い分析が加えられている。氏の本書「はじめに」の中で、「……河上ほどの思想家にとっても、思想的に首尾を一貫させて生きることが、どんなにむずかしいことであるかを、私たちは考えさせられる。……人間が現実生きるという事実と思想との関わりのたいせつさが、いくらかでも伝えられれば幸いである」と述べ、本書の特徴が示めされている。

なお、瓊末に属することであるが、河上が京大赴任当時の記述（五八ノ五九ページ）中、「河上より二年おくれ河田嗣郎が赴任している」とあるが、河上と河田は同時の一九〇八（明治四一）年八月二四日に講師に



河上肇 人と思想 山田虎義 著 清水書院

任命され、翌一九〇九年十月には兩名とも助教授として学生の演習旅行に同行している（河田は河上より二カ月おくれで助教授、教授は三年おくれである）。また西田幾多郎については東大選科出身と述べられながら、同じく選科出身の戸田海市を「東大法科大学政治科を卒業して京大に赴任し云々」とある。西田と戸田（戸田を介して河上）の交流を思うと兩名が第四高等学校教授をへて、京大に赴任していること、念のため指摘しておく（H生）。

当 番 日 誌

◎九号会報を出す、蜷川虎三先生がなくなられた。いろいろ追悼文が出た。氏についてどれだけ語られたか？時を経て始めて正當に語られる事もある。今後の蜷川論を期待したい。我等が会にとっても、また大きな損失であった。合掌。

◎ストローはひよっとすると、まずいものを口中であまりそのまずさを感じないで飲む道具かも知れない。世に管見という言葉があるらしい。当番の記録をしばらく担当するについて、ヤング・ソールジャー大門翁中広い活動、識見の主であっただけに、やりにくい。どなたか適任者に早く引継いでいただきたいもの。

◎本号より「会員通信欄」を設けました。東京河上会の真似をした。いろいろな形でこの欄を使っていたければ、モノ真似のしがいあり、と

いう事で、本誌が鶴のマネをした鳥になるかならぬかは、会員の方のたより次第です。勉強して通信をお寄せ下さい。たよりに致して、おります。

◎学生諸君に会って話を聞くと、マルクスもケインズも興味ないという。何に興味があるかと問えば、コンピューターと出た。かつてその一端に付合った者として吃驚す。機械を動かす前にプログラミングが、あってプログラムの前には、システムズ・エンジニアリングがあって、その前には………。まずは何をするか？ 何がするに値するか？について思考と判断が先行する。たかゞプログラム程度と言ったって二三年もすれば、マルクス・ボーイ達の方が、プログラマーとしても有能になり、それから先は一層差がひらく。何故だろう？

◎ヴォランティアの集りの事務局員は、それぞれ本職があつてとても思うに任せない。パンクチャル、パンクチャルと大門老に宣言され、尻をたゝかれても、花散って、木々の緑が溶けてアスファルト舗道を染め今年の夏は夏らしい夏だと言ううち、風の音に驚かされて会誌まとめにあわてふためく有様の滑稽。

◎前々から辞意を洩らしておられた住谷先生が、おからだの関係から、いよいよ辞意堅く、いつまでも甘えてばかりもらえまいと六月十七日甲南大学へ、不揃、雁首のまゝ、学長の杉原四郎先生に代表世話人を、お願いに参上する。

（大久保記）

編集後記

総会御案内号が皆さんのお手許に届くのがおくれましたことおわび申し上げます。新人編集者の不手際とお許し下さい。「情報センター」の提案が〇氏よりありました。すでにおハガキで頂いたものもあり、次号より掲載したいと思います。

（細川）

